
涼宮ハルヒの反転

佐々倉弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの反転

【Nコード】

N6174U

【作者名】

佐々倉弥生

【あらすじ】

実はハルヒやキヨンのクラスメイト、成崎彩乃は（本人はただの妄想だと思っていたが）、長門や朝倉等の情報操作にも耐えられる記憶力を持っていた。

一年次も終わりに近づいた二月頃、彩乃はクラスメイトの異変に気づき――。

涼宮ハルヒの反転 ・ 自己紹介 ・ (前書き)

これは私が勝手に妄想で書いた話です。。。都合主義です。。。

初心者のため誤字脱字等あるかもしれません。その際はご指摘宜しくお願いいたします。

涼宮ハルヒの反転 ・ 自己紹介 ・

アタシの名前は成崎彩乃。とある県立北高校の一年五組に在籍していることになっている。

まあ、ここには常識のなっていないお嬢さんがいるせいで有名になっってしまったわ。涼宮ハルヒ。彼女は変人だけど実際には凄い能力を持っていそう・・・だなあ？ あくまでイメージだけ。。ね。

裏がありそうなクラスメイトは直感でもう二人いるの。。。一人は朝倉さん。五月ごろすぐカナダへ転校したのだけど。。。なんか記憶の片隅に。。。十二月頃かな？クラスにいたような気がする。大野木さんにきいても気のせい的一点張りだし。とにかく不思議なおいのする人だったわ。

そしてもう一人は、皆から《キヨン》って呼ばれてる男子。彼がクラスメイトから本名で呼ばれているのをアタシは見たことが無い。なぜ裏がありそうかって？それはあの涼宮さんのお眼鏡にかなったクラスでゆういつの人だから。それだけよ。入学した頃はどこにでもいそうな冴えない感じの人だったけど、季節が流れてくうちにだんだん不思議なオーラがでてきた感じがする。きつと裏で凄い事体験したんだろうなあ、っていう気がした。彼は冬のあの日、確かに朝倉さんのことで気が動転していた。それを誰一人として覚えていなかった。アタシ、妄想激しいのかなあ？事実と、そうで無いものがどうしても区別できないの。

今年の夏休みだっですごく長かったような。。。他にもおかしいな、って思ったことはたくさんあったけど、、、
全てアタシの思い違いなの。
きつと。

涼宮ハルヒの反転 ・一・

ある朝アタシは急いで学校へ走っていた。

完全に寝坊した。この険しいハイキングコースがこたえる。

アタシはそこまで体力が無い。ハア、ハア、とつく息はとづくに底をついていた。

ああ、もうだめだ間にあわない、と諦めかけていたその時誰かがアタシの側をすりぬけて先へかけていった。

んん？今の人つてたしか・・・。
どことなく涼宮さんぽかったが髪が膝まであるくらいだったから人違いだろう。

ポニーテールに結わえたそれは、どこかおぼつかない足取りで走っていき、

いずれ見えなくなった。

全力ダッシュのお陰で、なんとかギリギリセーフで学校についた。ふらふらと教室へ入り、息も絶え絶えのまま自分の席に腰をおろした。

ふう・・・。何でよりによってこんな時に寝坊なんか・・・。

朝からもうつかれた！！

「珍しいね、綾乃の始業ギリギリ登校。」瑞穂が大声で言った。佐伯瑞穂。アタシは結構仲よくさせてもらっている。

先ほどの台詞のせいで教室中が笑いに包まれた。いいから、そーゆーの。

そうこうしているうちに、岡部教諭が入ってきた。

起立、礼をして着席。その後、出席をとる。

違和感を覚えたのはその時だ。この一年五組には現在男子15名、

女子14名、計29名在籍している。だが、

何故か女子の名前の数が男子の名前よりも多かった。男子が二人も減った訳じゃない。アタシは先生が今さっき言った、

「・・・という事で、男子が14人、女子も14人で、欠席は“女子”が1人。28人が、なんだか寂しいな、ははは。」と、言ったのを聞き逃さなかった。

あたしは岡部教諭が言い間違えたと思い訂正を言ったが、

「うん？ 成崎、俺は何も間違つて無いと思うが・・・。」と先生はアタシに言い、「何か言い間違えたか？」と、皆に聞いた。

だが帰ってきたのは意外な言葉だった。

皆口々に「間違つてないです。」とか、「欠席は女子で合ってます。」だとか言っている。

さすがにそれはないでしょ？ あまり冴えない部類に入る人とはいえ、欠席しているのは一番窓側の後ろから二番目にいる、涼宮ハルヒの前の席の、

あの“キヨン”なんだから。

涼宮ハルヒの反転 ・二・

・・・うそでしょ。

突然、クラスメイトの性別が反転するなんて。何かの思い違いよ。

アタシはHRが終わったあと、大野木菜々夏にもう一度確かめてみた。

「彩乃、大丈夫？さつきから。。ねえ？」と、瑞穂の方を向く。

「ええ。彩ちゃんが突然手を挙げたと思ったら」と瑞穂が言って、

「キヨンは男子です、なんてね、言っちゃうんだもん。ありえないわ、そんなの」と、いつの間にかいた佳実が言った。

「彩ちゃん」菜々夏が面と向かって言った。

「現実と空想の世界はきつぱり線を引かないとダメなの。あなたが真面目にそんなこと言うから、逆にこっちが怖いわ」

そうか、うん。そうだよね・・・。ただの思い過ごしだったみたい。

「そりゃそうよ。あの涼宮さんとコンビ組んでるくらいなもの」と、瑞穂。

・・・あれ？涼宮さんは？あの奥の席にいたと思ったのに。

窓側一番後ろの席は空っぽだった。

涼宮ハルヒの反転 ・二・（後書き）

ども。佐々倉弥生です。

ここまで読んでいただきありがとうございます！

若干、成崎彩乃がアニメのイメージとキャラが違ってますが、、、、
なにしろ設定のみの人物なので。。。大目にみていただけるとあ
りがたいですっ。

三話目ももちろん書く予定なのでよければ見てってくださいね！

「なあ、成崎」突然声をかけられた。

「はい、？」振り向くと谷口がニヤニヤして立っていた。 気
持ち悪つ。

「成崎、お前つて今日学校来るの遅かったよな？」

実際あなたとほとんど違わないタイミングで来たんじゃないかしら。
「なに？ 急に」たぶん谷口とは初めて会話をまともに交わしたと
思う。

「いやー、さつき国木田と、げた箱を見てきたんだが、キヨン子の
上靴がないんだ。この学校には来てるらしいんだが。ほら、
教室にもいなりや保健室に直行した訳でもなさそうなんだ」

。だから？

「もしかしたらお前、キヨン子のこと見てないかなあ、と思って、
だなー？」と、谷口。

「あの子、なんでそんなにキヨンの居場所が気になるの？」

確かに仲は良さそうだけど。ほら、いつも一緒にお弁当食べてるし。

あ、でもそれはキヨンが男子で ？ うーん、記憶がこ
んがらがるなあ。

「それは、ええつと、だな 「谷口の耳が真っ赤になっ
た。

なんかあるのかしら？

「そこにはふれてくれるな、とにかく！ あの、超ロングポニテダ
ルデレ野郎、は何処だ！？」

顔が近いし、声でかいし、さつきと質問が違うし、言ってることの
意味が分かんないよ。

「超ロングなポニーテールの人？」まあ、ダルデレは別として。

「ああ、そうだ。そんなの、北高に一人しかいないだろう？」

そういえば、今朝見たのって、確か。

「確かに見たような気もするけど、見たのはここに来る途中だから。今どこにいるかなんて、知ったこっちゃないし、そもそも本人かどうか分からないわっ」結局、何が言いたいの？

谷口は躊躇したように見えた。でも、すぐ口を開き、

「お願いだ、あいつを探してきてくれないか？ 昼休みにでも、な、いいから。たのむぜ、成崎」谷口は顔の前で手をあわせ、懇願した。「ええー！？ 全くもって理解できないんだけど？」

谷口って、こんな人だったの？ ってか、なんでアタシなのよ。

「じゃあ、聞ぐが。片思いの人が朝、確かに学校へ歩いていたはずなのに、いざ、教室に行ってみると、来ていなかったとして、お前は心配しないのか？」おい、顔近いつてっ。

つつこみどころありすぎて、疲れるんだけど。しかも今キョン君のこと【片思いの人】って言った？

「。。まあ、いいよ、行ってきたあげる。でも期待はしないでね」

「おお、助かる！ たぶんあいつのことだ、文芸部室にでもいるのだろう」

だったら余計自分で行けよ。

アタシは仕方なく、特に今まであまり話をしたことの無いような男子の、パシリを引き受けてしまった。。。

涼宮ハルヒの反転 ・三・ (後書き)

ども、ササクラです。

えっと、、次話から話が大きく動いていく。。。予定です。。
よろしければ次も見てくださいくださいね！

涼宮ハルヒの反転 ・ 四 ・ (前書き)

第四話ですね、前の時から少し時間がかかってしまいました。

まあ、ここで今後の話の内容がきまってくるので
一応、試行錯誤はしたつもりです。

涼宮ハルヒの反転 ・ 四 ・

「はああ〜……。」

なんで、ヨリにもよってアタシが、あの、アホの谷口のアホくさい
お願いいきちゃったのかしら。あー、アホアホアホアホアホノスケ
！！

今は昼休み。引き受けてしまったからには形だけでも行ったほう
がいいだろう、ってことで、アタシは文芸部室へ足を運ばせていた。
「どうしたのよ、冴えない顔して」後ろから、ぽんつと肩を叩かれ
た。

「ああ、佳実じゃない。アタシなら、今、SOS団部室に……」

「ええっ！ 彩、そんなとこ行くの？」

佳実は大きな段ボール箱を持っていたので、バランスを崩して転け
そうになっていた。

……そこまでドン引きしなくていいから。

「だって、さつき谷口に……。」

「さつき言ってた話ね。」佳実は見ると、どつでもいいや、と
いう顔をした。「ご苦労さんなこった。それじゃ、コレ岡部先生の
所に持ってかなきゃならないから」

じゃ、と言って佳実と別れた。

部室棟の最上階まで来たの、初めてかも。アタシはそう考えつつ、
階段をのぼった。

「……なんにも覚えてないのか！？ なあ、古泉、長門……」

階段をのぼりきったところ、文芸室から、女子の怒鳴る声が聞こえて
きた。……涼宮さん……しかないわよね。

そしてとうとう、文芸室の前に来てしまった……。この中へ入る
にはさすがに勇気いるな……。

「コンコンッ」

。なんだか部室の中の空気が止まった。ドアの外でも分かる。

……「ガチャッ」ドアが開いた。

「！！……これはこれは、お客さんですか」

出迎えてくれたのはええつと、九組の、たしか……。

「古泉です」

……！！！！！！心読まれた？！

つてか、なんかスマイル顔だし、背高いし、結構イケメンだしっ！
？どーしてあなたみたいなのがここにいて、と聞きたくなった。

「中へどうぞ。」

「あ、はい。。。」

部室には、古泉君の他にもう一人、隅っこで、黙々と長編物語を讀ハードカバーんでいる女子がいた。確か同じ学年の、名前は……。

「長門有希」彼女が顔をあげて言った。

……！！！！また心読まれた！？ SOS 団ってそーゆーことする
部活なの？！

「そういうわけではない」

……。長門さん……。

「ただの偶然」

……ハア……。

「あの、成崎さん、あなたがここに来たからというには、僕たちに何か用事があったのではないですか？」唐突に古泉君が言った。

「ああ、そうなの、実は人を探して……。」と、言いかけて、アタシはあることに気づいた。

さつきドアの外で起きた怒鳴り声の主は、誰？ 涼宮さんではないし、もしかして、長門さんや古泉君？ でも普通、自分に向かつてあんなこといわないし……。気のせい？ ま、いっか。

「……？」

いや、古泉君、そんな0円スマイルで、げげんな顔しないでください。

「いやっ、ホントに何でもないって、ちょっと気になることがあっただけです、古泉君。……えっ!?!」

気がつけば、長門さんがこちらを凝視していた。

「……」ジーンと見つめてくる。

なんだか、とつても怖い。苦手なんだよな、こーゆー人。長門さんを横目で見つつ、

「……あ、あのっ、キヨン君探しに来ただけですからっ。いなさそうですねっ……ハハハッ……かえりますっ」

「……!?!」

二人の顔つきが変わった。二人とも表情は一緒だけど。

「あの、今、なんとおっしやいました?」

「ハハハッ……かえりますっ」これのこと?

「いいえ、その前です。」

……あのっ、そんな真面目な声を出さないで下さい、しかも顔近いですっ

「キヨン君探しに来ただけですから?」

突然何を言い出すんでしょう、みたいな顔しないで下さい。

「成崎さん、あなたのいう、“キヨン”というのはもちろん、女性でいいんですよね」

「えっ? 男子に決まってる……」……ってそれはアタシの記憶違いでしょっ。「あ、は、はい。女子ですね、ハハハ……」

二人の視線が痛いんですけど……。

古泉君がアタシを見つめて(顔を近づけて)、言った。

「まさかとは思いますが、あなたは、彼女が男性であった記憶があるのですか?」……えっ!?!?

「いえ、ただの妄想ですっ。きつと。夏休みやクリスマス前の時みたいなの、ぼやっとした記憶だし……。それに、ここへ探しに来た理由も別ですから。……ではっ」

アタシは二人に微笑して、急いでUターン、そそくさと部屋を出ようとした。

「待って」

ぼつり、と、長門さんが口を開いた。

振り向くと、目の前で、アタシをエー玉のような目でみている。瞬きひとつしない。

「何？」乾いた声でアタシは問いかけた。

長門さんは古泉君へ一瞬目配せしたかと思うとまた、アタシの方へ振り返り、口を開いた。

「あなたは実は……」

長門さんはあまりにも衝撃的なことを、まるで数学の公式を授業で発表するかのようになつて、さらりと saying のけた。

「なつ　　!?!?!?」

涼宮ハルヒの反転 ・ 四 ・ (後書き)

どーも、ササクラです。

なんだか彩乃のキャラクターが安定しませんね 。 もっと腕を
上げたいです。

。 私が飽きさえしなければ、今後の話も順次、載せてゆく予定です。
。

感想やアドバイス、だめだし等、なんでもいいので下さいっ!!

「なっ …… !?!?!?」

な、何を言ってるの、この人は。バカにするにも程があるわ。

「あ、アタシが『人間ではなくて未知の生物』……なんて、そんなふざけたこと有り得ないでしょ！」長門さん、きつと小説の読みすぎよ。

「正しくは、有機情報の分裂により情報生命体化した極移粒子が有機生命体の遺伝子異常を引き起こしたことによって誕生した、部分的情報粒子覚醒化有機生命体」長門さんはアタシをしかと見据えて「今までに類をみない、全くの新種の融合生物」と言い合った。

「全然あなたが何を伝えたいのか解らないわ」情報とか生命体がどうか、そんな電波話聞かされても。

古泉君はまるで数年前にやってた『トビの泉』でも見ているような顔つきでうなずいている。

「そうでしたか、成崎さんがまさかその“部分的情報粒子覚醒化有機生命体”なる新種の生物だったとは、驚きを隠せませんね。機関の調べでもここまででは判別できませんでした」こ、古泉君？ 本当に信じているの？

……ガチでアタマにきた。ざけんなっ。

「な、なんなの?! 谷口にどーでもいいお願い聞いておかしな部活の部室に来てみたら、初対面のおかしな人達に『お前は人間じゃない、新種の人型の生物だ』なんて、全然意味が解らないんだけど……!」

気がつくともアタシは一人で二人に怒鳴り散らしていた。古泉君は一瞬悲しげな顔をしたが、実際にはそんなこと微塵にも考えていないだろう。一方の長門さんはいえ、アタシを無表情で凝視した

まま一ミリも動かない。

逆にそれがム力ついた。

「私が言ったことは事実」と、長門さんはおもむろに口を開いた。

「成崎さん、長門さんは嘘はいりません。信じがたい事だとは思いますが、あなたは確かに一部を情報で構築された生命体です」と、古泉君が続く。

……………。

「おい！ お前等おまえらいい加減にしろ！」

だれかの怒鳴り声が聞こえてきた。そしてその人は確実にこの部屋の中にいる。

どこだ？

と、その時。

「ドギヤタンッ」

部室の掃除用具入れの扉が勢いよく開いたのだ。戸をオモイッキリ蹴ったらしい。

狭い用具入れから出てきたのは――！。

今朝アタシをダッシュで抜かしていった

ポニーテールの

背はあまり高くない

かわいい顔をした

だけど

とても複雑な表情をした

女子高生だった。

そして

あたしが今日、建て前にも本音的でも一番求めていた人だった。

その人はものすごい勢いで長門さんと古泉君のところへ詰めより、

「お前等！ あのな、そもそも、初対面の相手をわざわざ引き留めて突然『お前は非人間』発言するなんて、普通に考えておかしいだろうが！」

それに同調する古泉も古泉だ。そこにいる成崎さんが怒るのも当然だ。全てにおいて順序ってモンがあるだろう？

古泉はその辺のことはよく解っていると期待していたんだが、ガツカリだ」と、とにかく叱りつけた。

「どうかしました？」

アタシはキヨン君一（？）のことをずっと見つめていたらしい。不思議な顔をされた。

「い、いいえっ、なんでもありませんっ。はじめまして、成崎です。ガツカリだ」とにかく叱りつけた。

「どうかしました？」

アタシはキヨン君一（？）のことをずっと見つめていたらしい。不思議な顔をされた。

「い、いいえっ、なんでもありませんっ。はじめまして、成崎です。思わず口が滑ったというべきか。」

「ええと……、クラスでほぼ毎日会ってますよね？ ……あ、そういえばさつき成崎さん、俺が女体化する前の記憶がどうたらこうたら？」

「ええ、あなたを、あなたのその姿を見たのは今朝が初めてです。あなたが男子である記憶、もつと言つと、年末の頃、涼宮さんがいなくなつて、風邪が蔓延した教室であなたが半狂乱になったこともすっかり覚えています」

なぜだろう？ あたしは堂々と言い切ってしまった。どこからその自信がくるのだろうか。キヨンは、絶対男子だ、と。

キヨンもコトの重大さに気づいたらしい。

みるみるうちに顔が真っ赤になつていく。アタシは少し恥ずかしくなった。

「お前だけだよ、覚えていてくれたのは」そう言つてアタシの手を

握りしめた。

きつと、こんなこと口にだしちゃ悪いから絶対言わないけれど、今にでも泣き出しそうな、真っ赤になったその顔は、とてつもなく、可愛いかった。

涼宮ハルヒの反転 ・六・（前書き）

おひさー！

前回から時間あけてるにもかかわらず文章力は相変わらずです（汗
では

涼宮ハルヒの反転 ・ 六 ・

「今回涼宮ハルヒを中心とした情報フレアは情報統合思念体の観測結果にまで影響が及び内容が改ざんされたため情報統合思念体は彼が男性であるという主張は事実ではないとして受け入れなかった。ただし成崎彩乃あなたの存在が確認されたことによりその可能性も否定できないため、わたし個人として一時的に事実と認め行動する」

長門さんがひとりでしゃべるしゃべる。ここまで息継ぎほとんどナシに一気に話してやっとここで口をつぐんだ。

てか、情報フレア？ 情報ナントカナントカ体？ なんなの、それ。

ちなみに今は放課後である。

長門さんがどうも神経の方がイツちゃってる訳じゃなく、嘘をついてるようにもみえない……ので、まあ、アタシの正体はまず置いておいて、昼休みは時間が無くなってしまったので放課後もここへきた次第である。

「……そうですか、わかりました。長門さんがそうおっしゃるのであれば」古泉君は腕を組んで考えている（フリ？）。

顔はかっこいいのに、なんだかなあ……。ーって、……

！……！ アタシは古泉君のことを見続けていたらしい。……目えあっちゃったんですけどっ。

うん？ 僕の顔に何かついてますか？ って顔、しないで下さいっ！

「？……まあ、仮にそうだとして、涼宮さんはこの事態をどの様に考えているのでしょうか？」うん？ 僕の顔に何かついてますか？

って顔、しないで下さいっ！

「……仮にそうだとして、涼宮さんはこの事態をどの様に考えているのでしょうか？」と言って、さっきから一言もしゃべらないキョーンの方を向く。

「ん、あー……、あいつが何を考えてるかなんてお前の方が詳しいんじゃないのか、古泉」

「ええ、そう自分でも自負しておりましたが、なにしろ僕にとってはその事実は存在しておりません」古泉君は両手を広げて「無論、成崎さん以外全ての人類の記憶が書き換えられておりますので」と、言った。

……この古泉君の言うことが本当だとしたら、この人は推測をもとに話している……？

「ガチャッ」

文芸部室のドアが開いた。中に入って来たのは……、

「みなさん、こんにちはあー」なんかめっちゃ可愛い二年生だった。上級生はアタシのことを見つけると

「？ お客さんですか？」と聞いてきた。

「あ、は、はい。成崎彩乃といいます。えーっと……」

「朝比奈みくるです。今お茶いれますね」と言っただただと脇を通りすぎていった。

「問題はいかに涼宮さんの気を変えてあなたが平凡な人間であるかを印象づけるかです」古泉君はキヨン君に向かって言った。「まあ、その涼宮さんが見あたらないのですが」

「見あたらない？」キヨン君は俯いていた顔をあげた。「ハ、ハルヒはこのことを知ってるのか？」

古泉くんは髪の毛をかきあげて、

「いいえ、おそらく知らない……記憶はないかと。自らの記憶を消すことで辻褄を合わせようとしたのでしょうか。もちろん、本人は無自覚です。ですから、もし記憶があるのであれば、一人で何かしようとはせず、誰かに頼ったり、もしくはあなたに何事もなかったように話しかけるでしょうし。ちなみに現在彼女のことは機関のメンバーが搜索していますが、HRの後校門を出ていくのを見たの

を最後に行方は全く掴めていません」「困ったものです、と、彼はお茶を啜った。

「……あの、機関？ 去年の暮れ？ どういうことなの？ 怒っていい？ いい加減」

よく分からない単語が耳を通過していく。そして何かひっかかる。そして頭が混乱していく。

涼宮ハルヒの反転 ・六・（後書き）

サクラです。お久しぶりですつ。一言でいうと、PCが病気にかかって寝込んでました、はい。

なんだかキリの悪すぎる終わり方になっちゃいました……
楽しみにしてる人^{いたらい}

にもうしわけないです。

誰か感想とか、アドバイスとか、してくれないかな〜。もし、感想書くに値しない作品であつたなら仕方無いけど……

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6174u/>

涼宮ハルヒの反転

2011年8月10日02時24分発行